

2024 年度 事業報告書

公益財団法人 日本 AED 財団

I. 事業期間

2024 年(令和 6 年)4 月 1 日～2025 年(令和 7 年)3 月 31 日

II. 事業報告

「心臓突然死から市民を救うことを目的とし、もって我が国における安全安心を確保することを目指す」という財団の理念に基づき、School（学校現場での救命と生徒への救命教育、学校での心臓突然死ゼロを目指した取り組み）、Sports（スポーツ現場への心肺蘇生・AED 教育の普及促進、AED 活用体制の整備によるスポーツ現場での心臓突然死ゼロを目指した取り組み）、Social（社会運動と Social Network を活用した救命システムの確立と普及、情報発信）の 3 つの S を柱とした取り組みを継続して行った。2024 年度の特筆すべき事業として、市民が AED を使用できるようになって 20 年の節目の年であり、20 周年を記念した取り組みを関係団体と実施するとともに、スポーツ現場での AED の有効活用や危機管理体制の構築を支援するスポーツ版アプリを作成し運用を開始した。

III. 会議開催

定款に基づき以下の会議を開催した。

評議員会(1 回)：6 月 5 日(定時)(対面)

理事会(4 回)：5 月 17 日・7 月 1 日・10 月 18 日・3 月 11 日

(於：WEB・対面のハイブリッド開催、7/17 は書面決議)

実行委員会(2 回)：5 月 16 日・1 月 16 日(於：いずれも WEB・対面のハイブリッド)

《主な取り組み》

(1) 社会全体に対して行う事業

①AED 推進フォーラム

減らせ突然死 AED 推進フォーラム 2024 救いうる命を救える社会の実現に向けて ―スポーツから広げる AED― を開催(2024 年 11 月 25 日)

総勢 220 名の参加を得た。岡本会長の挨拶にはじまり、I 部で「スポーツ現場での AED 使用の実際」についてのディスカッション、II 部でスポーツ中の心臓突然死ゼロに向けたアプローチと挑戦として「日本サッカー協会の取り組み」「体育活動中の心臓突然死防止の取り組み」「東京マラソンでの経緯を踏まえて」「スマホアプリで安心安全なスポーツ環境を実現する新たな取り組み」についての講演、III 部で「スポーツ中の心臓突然死ゼロとスポーツを通じた AED の普及を目指して」についてパネルディスカッションを行った。

記録冊子を関係団体に配布したことに加え、フォーラムの内容を広く一般に知っていただくため記録冊子と動画をホームページに公開した。

https://aed-zaidan.jp/report/20250228_2.html

②表彰事業 (AED 功労賞)

AED の利活用促進の為に仕組みや仕掛け作りに貢献した個人や団体を表彰し、さらなる利活用を促進することを目的に表彰事業を実施した。AED を活用して救命に関わった個人・団体を全国から自薦・他薦を募るためホームページや SNS 等により広く募集し、17 件の応募が

あった。選考委員による公平な審査を経て①の AED 推進フォーラムで表彰式を行った。また、記録冊子および、ホームページでもその取り組みを紹介した。

今年度は下記 3 件が表彰された。

【最優秀賞】堺市消防局 様

「AED の有効活用に向けた戦略的救急施策」

【優秀賞】大島地区消防組合龍郷消防分署 様

「“いのちを紡ぐまちづくり” 奄美大島龍郷町の取り組み」

【優秀賞】ウエルシアホールディングス株式会社 様

「ウエルシアグループドラッグストア店舗における AED の設置と
お客さまや地域の方々の救命処置への取り組み」

③情報発信

- 前年度に開始した救命サポーターアプリ (teamASUKA) の普及、同アプリを通じた情報発信に努めた。
- デジタル技術を活用した教育コンテンツである救命コーチングアプリ Liv を開発公開し、広く AED を用いた救命処置を学ぶことが出来る環境を整えた。本アプリを救命サポーターアプリと連携させることで、活動全般の強化を図った。
- ホームページや各種 SNS、動画配信サイトでの情報発信を実施した。
- より情報が伝わりやすいよう、ホームページの改修に着手した。
- ニュースレターを発行し、当財団の活動の周知と啓発に役立てた。

<https://aed-zaidan.jp/report/index.html?tag=4>

- AED を学ぶための e ラーニング教材『心止村湯けむり事件簿』は好評により配信を継続した。

<https://aed-zaidan.jp/suspence-drama/index.html>

- 中村憲剛大使・蝶野正洋大使・有森裕子大使：救命サポーターへの応援メッセージを継続して HP に掲載した。

<https://aed-zaidan.jp/project/index.html#MESSAGE>

中村憲剛大使・蝶野正洋大使・有森裕子大使・青木まり子大使・山本篤大使：7 月から 9 月に日本心臓財団・日本循環器学会・日本循環器協会と共催した健康ハートウィーク 2024 でメッセージ動画を提供した。

- 宝くじの社会貢献広報事業の助成を受けて「命を守る心肺蘇生 AED」教本 30 万部、啓発動画、DVD、チラシの制作・配信・配布を行った。
教本は全国の消防、日赤などに広く配布し、活用いただいた。

④AED に関する調査・提案

- 小児用パッドに関わる啓発、情報発信を継続して行った。
- 2019 年 7 月に経済産業省から発表された AED の JIS マークの普及・啓発に努めた。

(2) スクール関連事業

①学校教育関連団体との協働事業の推進（学習指導要領への記載）

小学校から始まる学校での救命教育を推進するため、小学校の学習指導要領への新規記載、中学校高等学校の指導要領における位置づけの強化、教員養成課程への救命教育の導入などを求める取り組みを進めた。

9 月には盛山文部科学大臣に面会し、学校、特に小学校での救命教育のさらなる普及などを求めて提言「小学校からの救命教育を学習指導要領に盛り込みを」を手渡しした。

②救命教育副読本等の配布

小学校安全教育用副読本を作成し、ホームページや案内用チラシ等を通じて、広く小学校に紹介し、希望する学校(141 校、13,508 冊)、教育関係機関等(22 件、19,090 冊)へ配布した(2025. 3. 31 集計)。配布した学校に対しては副読本を活用した救命教育に関するアンケート調査を行い、成人用副読本とともにホームページからダウンロードできるようにした。

<https://aed-zaidan.jp/user/media/aed-zaidan/files/download/poster23-4.pdf>

③学校版 EAP(エマージェンシーアクションプラン)の作成・配布

教育現場での心臓突然死を減らすために、学校関係団体、医療関係団体と連携し、学校において緊急事態が発生した際の一連の行動を事前に確認していざという時に備える、Emergency Action Plan の配布・配信を行った。

https://aed-zaidan.jp/user/media/aed-zaidan/files/download/School_EAP.pdf

④スクールフォーラムの開催

小学校における救命教育導入への基盤を構築するため、研究委嘱校において、救命教育のモデル授業やシンポジウムを2月7日に三重大学教育学部附属小学校(参加150名)で開催した。

⑤関連する情報の発信

文響社うんこドリルとコラボし、小学生から大人まで、AED や救命処置について楽しく学べるアプリゲームとなぞかけ動画をひきつづき配信し、新たに制作した冊子は小学校を中心に14.5万部を配布した。

ゲーム

https://play.unkogakuen.com/manabi/game/lifesaving_aed/

なぞかけ動画

<https://youtu.be/YlCNxPSzSg0>

<https://youtu.be/2B-8kp5JN9Q>

冊子

https://aed-zaidan.jp/user/media/aed-zaidan/download/aed_drill_fix_230927.pdf

また、桐淵理事が中心になってまとめた『『ASUKA モデル』と小学校からの救命教育の推進』の研究冊子の紹介をイベント会場、ホームページ上で引き続き行った。

https://aed-zaidan.jp/user/media/aed-zaidan/files/download/Kiribuchi_report.pdf

加えて、救命コーチングアプリ Liv for School の開発をすすめた。

デジタル技術を活用した教育コンテンツである救命コーチングアプリ Liv を学校教育で活用するために、学校版の開発とその試験運用による改善を進めた。

(3) スポーツ関連事業

①提言の作成とその啓発と実践

『スポーツ中の心臓突然死ゼロを目指して』、及びスポーツ版 EAP(エマージェンシーアクションプラン)を引き続き公開し、スポーツ団体に導入を促した。

https://aed-zaidan.jp/user/media/aed-zaidan/files/download/EAP_Sports.pdf

②スポーツ施設の AED 設置ガイドラインや案内標識の見本提示と RED SEAT プロジェクト

スポーツ競技場において、観客の心臓突然死を減らすため迅速に AED を運ぶシステム「RED SEAT」を考案し、その普及に努めた。サッカー J リーグ、プロ野球において試験実装するだけでなく、ラグビーリーグワンにおいては、4 チームで実装され、実際に公式戦においてシステム運用がなされた。観客の安全に寄与するとともに、チーム、観客に対して AED や心臓突然死についての啓発活動を行った。

宝くじの社会貢献広報事業の助成を受けてスポーツ現場での AED の有効活用や危機管理体制の構築を支援する「救命サポーターアプリスポーツ版」を開発し、スポーツ施設やイベントで活用を開始した。

③スポーツ中の心停止事故等に関する情報収集方法の検討

安全なスポーツ環境の構築のため、関係機関、スポーツ関係者・大学・研究機関の教員・研究者等の有識者と共に、データに基づいた救護救急体制の整備構築を提案し、安全なスポーツ環境の構築に繋げることを目指し、スポーツ中の心停止事故等に関する情報の収集方法について検討を進めた。

④スポーツを通じた心肺蘇生・AED の啓発

スポーツ向け AED 啓発動画を監修し、継続配信した。

300 秒のキセキ【スポーツ編】

<https://youtu.be/6L-iEydV0m0>

日本 AED 財団の医師（本間実行委員）による解説動画

<https://youtu.be/Mfbsw9DgSeg>

また、車いすソフトボールチームや企業の陸上部にむけて AED の体験会や講習会を行った。

https://aed-zaidan.jp/report/20230704_2.html

(4) ソーシャルムーブメント関連事業

①各種団体と連携した社会活動の促進

AED の認知度向上を目的として、心肺蘇生・AED の利活用、普及促進につながる活動を各種団体（厚生労働省、消防庁、日本救急医療財団、日本心臓財団、NPO 法人大阪ライフサポート協会、および全国で PUSH プロジェクト（胸骨圧迫と AED を用いた救命処置を短時間で教育する PUSH コースを実施）を展開する団体など）と連携して行った。他の団体主催のイベントに協力し、救命講習などの開催やマスコミからの AED 取材への協力を行うことなどにより社会活動を促進した。2024 年度は市民が AED を使用できるようになって 20 年の節目の年であり、「まず呼ぼう AED」をキャッチコピーに、20 周年を記念した取り組みを関係団体と実施した。

【AED20 周年記念シンポジウムを開催】

AED が使えるようになって 20 周年。AED 普及啓発を推進する団体、企業が一つになって

「AED20 周年記念企画実行委員会」を立ち上げ、2024 年 7 月 14 日（日）に「AED20 周年記念シンポジウム～あつて当たり前から 当たり前使用前のものに～」を有楽町朝日ホールにて開催した。

<https://aed20th.com/>

【マスコミ取材等（新聞・TV等）への対応による促進活動】

このほか、関係団体、学会等と連携し、数多くのイベントを開催、協力し、メディアを通じた発信を行った：

<https://aed20th.com/event.html>

<https://aed-zaidan.jp/about/media.html>

②高精度全国 AED マップ『AED N@VI』の運営

ボランティアの協力を得て、精緻な AED 設置情報を継続的に取得し更新し続けることの出来る AED マップ（AED N@VI）の運営を継続した。各地で登録イベントを開催するなどして、救命サポーターアプリ、AED N@VI への登録、活動への参加を促した。

併せて、周囲の AED 検索機能や講習会受講歴の管理機能、アプリ利用者同士の SNS 機能などを有し、利用者同士を救命サポーターとして連携させる救命サポーターアプリ（teamASUKA）の普及、同アプリを通じた情報発信に努めた。ホームページ・チラシ、SNS 等でアプリの存在を広く社会一般に公表し多くのサポーターを得た。

さらに、関係省庁、関連団体と連携し全国 AED 設置情報データベースを構築し、全国 AED マップ（AED 設置情報を公開するページ）の運用開始を目指して検討を開始した。

3 月 31 日現在のマップ利用者数・登録数

個人サポーター：約 21,000 人、団体サポーター：75 団体、AED 登録台数：約 61,000 台、
アプリダウンロード数：約 80,000 件

③AED 救命支援システムの普及に向けた課題の整理

心停止現場付近にいる登録ボランティアへ、消防を通じて心停止発生情報を共有し、AED を現場に運ぶというシステムに関する課題の整理を行う事で、全国の既存 AED が活用される機会を増やす活動を進めた。また、AED マップ・AED 救命支援システム活用検討会を 7 月に開催し、引き続き AED の活用促進に向けた課題を整理していくこととした。

また、デジタル技術を活用した教育コンテンツである救命コーチングアプリ Liv を開発公開し、広く AED を用いた救命処置を学ぶことが出来る環境を整えた。本アプリを救命サポーターアプリと連携させることで、活動全般の強化を図った。3 月までの Liv 利用者は約 5,500 人であった。

④AED 講習会の開催

会員及びその他企業、スポーツ団体等から講師派遣の依頼を受け、AED 講習の機会を提供している。今年度も引き続き WEB で定期的にオンライン AED 講習会を実施するとともに、在京大使館職員、関東圏中学校の生徒と先生、宮内庁職員等に向けて対面での講習会を開催した。

講習会の実施は、イベントで 5 回、大阪万博のスタッフと出展企業に 11 回、企業・学校・自治会、その他へ 35 回、財団事務局より WEB での定期開催 23 回の計 74 回で、延べ 3,322 人の受講となった。

（2025 年 3 月 31 日現在）

以上のとおりであるが、2024 年度事業報告には、事業報告の内容を補足する重要な事項が存在しないので附属明細書は作成しない。